へら鮒

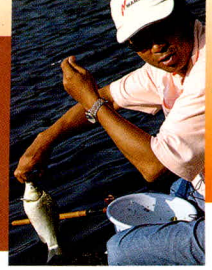
Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻

No.454 Oct.2003 10

●今月の表紙●

昨年12月号での連載終了以来、久々に孤高の野釣り師が特集で本誌に帰ってきた！
猛暑の戸面原ダムでの取材は、過酷を極めた。氏はいつものように淡々と、しかし、大いなる「凄み」を全身から発しながら、良型を引き抜き続けたのである…。



特集 孤高の野釣り師、見参。その釣り、「風林火山」!!

6 戸張 誠スペシャル。 戸面原ダム

14 Neoへらインビテーショナル 【第3戦】戸面原ダム

58 マルキュー チョーチン王座決定戦 筑波流源湖

新企画 〈5枚リミット制〉が生み出す新感覚な楽しさ！
Newゲーム【NHCへらぶなトーナメント】攻略法を、バリバリのNHCファイターが伝授!!

60 NHCスピリット 【Vol.1】高橋秀樹 in 清遊湖 Part I

特別企画 ベストフィールド筑波白水湖で繰り広げられた、ペレ宙魔神の強烈ペレ宙実釣編…!!

185 中島 上 ペレ宙の真実 後編

4 野の風景
洲の野原（茨城県）

18 名手・石井旭舟がいく、へら鮒出会い旅… へらぶな浪漫街道
《第十回》静岡県・一碧湖

26 スーパーアングラー小池忠教のエサ合わせ大全
《Vol.10》灼熱の岐阜・つつじ池で激釣！

34 大型狙いの楽釣宣言！ 山内研作&生井澤 聡
《第10回》亀山湖（千葉県君津市）

42 棚網 久の対決mode 1, 2, 3!
《Battle.31》対決モード全ステージ突破記念！
スピードスター宮田将弘スペシャル！ 椎の木湖

118 頑固一徹！ 自分の釣りを貫き通す男
《今月の釣り人》一匹狼で40年間通す 根藤正雄さん

120 竹とともに生きる。
《第2回》「魚集」作者 城 純一

124 杉山達也のSPLASH BEAT II
《Vol.10》谷養魚場月例大会でsplash!!

130 田辺哲男の「それってどーゆーことよ!?」
《Vol.10》糸井日出男の【テクニカルホールド】深宙!! 筑波湖

134 熱血釣り女・吉川ひとみがいく！「へらってヤバイわっ!!」
《Vol.16》台風を呼ぶ、クマ&ひとみ!?
GUEST:熊谷 充さん

138 列島縦断 旅するカメラ
《千葉県37》睦沢町付近 小高のセキほか

142 西日本川釣り紀行 北川穂積
《第10回》紀ノ川（和歌山県）

178 岡田 清 Deep Side Angle（ディープ サイド アングル）
《Vol.2》【「オーバー200」の世界。】 弁天F.C

190 野の風景
天の川公園（千葉県神崎町）

192 フィッシングレディ
《今月のレディ》町田久美子さん 管理釣り場・将監（千葉県）

50 電話で突撃!! 関東近辺釣り場情報

★エリアレポート
52 笠城ダム（福岡県） 河口正伸
54 邑知潟（石川県） 山本一朗
55 三山木新池（京都府） 前田誠志
56 大宮池（岐阜県） 後藤 誠

66 あらいしのぶの始めてみようよ、へら鮒釣り♡
《第6回》へら鮒釣りのラインって、どんなの♡♡♡

68 ガッツ小林が攻めまくる 若さとファイトの激釣記
《第15回》三名湖（群馬県藤岡市）

72 人間カーナビ稲毛利夫の実釣！野べら釣り歩き
《第10回》星ノ宮池（栃木県益子町）ほか

75 江成公隆のトーナメンター、復活への道。
《Vol.16》～【宙釣り両ダンゴ】復活への道！～ 伊藤洋一の常識② in 精進湖（&西湖!?）

82 GOZYUKKAMI TREASURE HUNTER アマヤン 天野正由
《その10》台風一過のチョー食い渋り（?）
（相模川・磯部のジャリ穴／海老名運動公園&奥多摩湖・諸畑橋）

86 水辺のプラネタリウム 吉本亜土
《今月の星空》「四谷怪談」

91 元気が出るへら鮒 西田美明
《第10回》「コンビニで元気」の巻

98 最狂ヘラ戦士養成所“鮒の穴” 高橋謙司
《第九話》今月の指令:「夏休み緊急SP。真夏の海でピチピチ水着ギャルをゲッチュ～♡せよ!!」

102 野田幸手園新聞

104 ワクワク管理釣り場情報

108 小売店情報

146 旅するカメラ 取材番外 思い出話
《第6回》大震災の影響で、足掛け2年に亘って訪れた兵庫県

149 竹、合成竿を使用した 未開の釣り場 釣行記
《その18》川尾池（茨城県潮来市）

156 トーナメント速報
「マルキュークラブ対抗選手権」地区予選結果

★へら鮒BOX
161 里ちゃんの新米編集長雑記
162 情報地獄ミミ
164 ボイス
169 わが輩はへら鮒である
170 新人モロちゃん奮闘記
171 プレゼント発表
172 釣果予想クイズ

175 広告索引
176 編集後記

※「竹は活きている」「釣りクラブ見参」「業界のタブーに迫る!!」「人物往来」は誌面の都合により休ませていただきます。

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

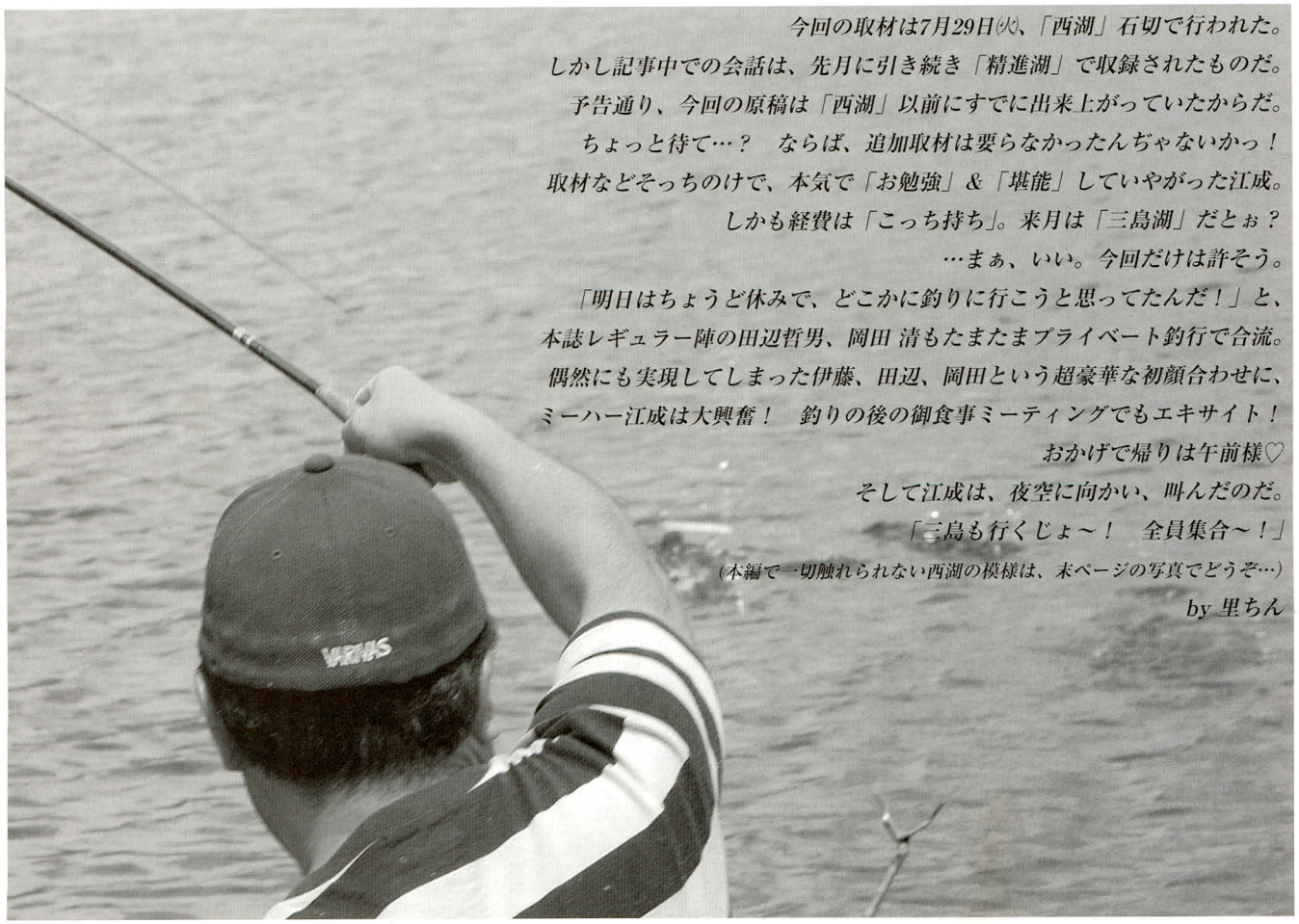
江成公隆の トーナメンター、復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連動企画！ 〈URL〉http://hesar.yokohamatsurumi.net

〈Vol.16〉
～【宙釣り両ダンゴ】復活への道！～

伊藤洋一の常識②

in 精進湖（&西湖!?）



今回の取材は7月29日㈫、「西湖」石切で行われた。
しかし記事中での会話は、先月に引き続き「精進湖」で収録されたものだ。
予告通り、今回の原稿は「西湖」以前にすでに出来上がっていたからだ。
ちょっと待て…？　ならば、追加取材は要らなかったんぢゃないかっ！
取材などそっちのけで、本気で「お勉強」&「堪能」していやがった江成。
しかも経費は「こっち持ち」。来月は「三島湖」だとぉ？
…まぁ、いい。今回だけは許そう。
「明日はちょうど休みで、どこかに釣りに行こうと思ってたんだ！」と、
本誌レギュラー陣の田辺哲男、岡田 清もたまたまプライベート釣行で合流。
偶然にも実現してしまった伊藤、田辺、岡田という超豪華な初顔合わせに、
ミーハー江成は大興奮！　釣りの後の御食事ミーティングでもエキサイト！
おかげで帰りは午前様♡
そして江成は、夜空に向かい、叫んだのだ。
「三島も行くじょ～！　全員集合～！」
（本編で一切触れられない西湖の模様は、末ページの写真でどうぞ…）
by 里ちん

里ちんが見た「伊藤洋一の釣り」。

ボクがへら鮒社に入社したのが4年前。初めて担当させて頂いたのが、誰あろう伊藤洋一その人であった。
「三択必釣ゼミ」。初めての取材、冬の野田幸手園。今では考えられない程、緊張しまくりの里ちん…。そこで披露されたのは、浅ナジミでガンガン早いアタリを演出していくメーターのウドンセット。凄い釣りだった。
「アタリ」ではなく「サワリ」を釣りを組み立てていく手掛かりとし、自然度が高く、その「サワリ」が最も雄弁に様々なことを語ってくれる「ナジミ際」に焦点を絞りきった壮絶な釣りは、おそらく多くの釣り人と同じであろう、「まずはドップリナジミ」が常識だったボクにとっては衝撃的だった。そして、サワリを手掛かりに全てをコントロールしていく伊藤洋一の釣りは、エサをブラ下げ、サワリが出にくい状態の中で「アタリ」だけを追いかけていく魔法のような釣り方に比べれば、実は「至極真っ当な釣り方」なのだと気付かされたのである。現在のように「速いセット釣り」がもてはやされるずっと以前から、伊藤洋一は当たり前のようにその釣りを体現してみせていたのであった。
それは両ダンゴでも同じだった。
ビッグへら鮒会三連覇を賭けた1年に密着した「ROAD TO 3-PEAT!」の取材で繰り広げられた数々の釣りを、ボクは忘れることが出来ない…。
「見た目の派手さに、誤解を生む危険性が高いな」とも思った。そして、「メディアでの取り上げ方が難しい釣りだな」とも。なぜなら、「ナジませ釣りこそ善。ナジませず、早いアタリを取りまくる釣りは、一般的でなく飛び道具的な悪」とする風潮は、想像以上に高い壁として立ちはだかっていたからである。表現方法を誤れば、単に「突拍子のない釣り」で片付けられてしまう危険…。取材をする側、いわゆる「語り手」を選ぶ釣りであったと思う。
江成公隆という「語り手」が、「寡黙な巨星」からどこまで「真実」を引き出すか、ボクも一読者となって送られてくる原稿に胸を高鳴らせている。

ムクトップの流行。

伊：それでムクはどうだったの？

江：しばらくはいい思いをさせてもらいました（笑）。ナジミ際のアタリだからって、エサがアマけりゃいいってもんじゃないって事も勉強出来ましたしね。伊藤さんがさっき言ってましたけど、程良いピンポン状態っていうのを意図的に作ってやる必要性にも気付いたんです。打ち返しのテンポも速いんで、へらの寄りも凄い。だから実は結構しっかりしたエサであったりするんですよね。

伊：そうなんだよ。俺のエサが軟らかいことが多いからって、そこのところを勘違いしている人が多いんだよね（笑）。いつも言うんだけど、アマいから・軽いから受けが出るっていうのは間違いだと。「合っているエサ」が受けるんだよって。受けている状態っていうのは、そのエサにへらが反応しているっていう「いいサイン」なんだ。

江：でも伊藤さん、僕はパイプトップのウキでは受けだけで終わっちゃうんですよ～。そこから先へ進めないんですぅ（泣）。

伊：そこまで来てるんだったら、あと一歩なんだよ。いや、ホントに。

江：そうなんですか～？　ムクより実はパイプの方が理にかなってるのでは？と感じるようになった今でも、ムクとパイプを行ったり来たりしちゃってるんですが…。

伊：ムクはダメだと思った？

江：うーん、僕的には効かなくなってきていると思います。色々と試してみても、肝心なところでスーッと入っていっちゃうケースが多いような気がしますね。デカいアマいエサを打ち切ったり、ハリスを伸ばしたり、オモリを飛ばしたりしてムリヤリ受けを出させても、スレが多くてリズムにならないんです。それが嫌だからって、結局ナジんだ位置でアタリを取るとしたら、パイプにはかなわないと思うんですよ。ムクだとアタリが流れちゃうし…。好きな人は今でもムクなんでしょうけど…。みんながやるから、へらも学習しちゃったのかな？って最初は思ったんですが、どうやらそれだけじゃないと感じ出しまして。

伊：と言うと？

江：ええ、受けを出させて釣りたいのに、入りやすいウキっていうのは間違いなんじゃないかって気付いたんですね。なんで気付いたかっていうと、ナジミ際の釣りの名手であるところの伊藤さんが、本の中で一度もムクに手を出してなかったからなんです（笑）。

伊：アハハ。確かに俺はムクのウキ持ってないよ。でも今の江成君の考察は正しいと思うなぁ。入りやすいウキで、ナジミ際のアタリを追い続ける事が出来た理由は、それまで攻められていなかったって事に尽きると思うよ。へらの反応が素直だったからこそ、成立し得た釣り方だったってわけだよね。そのタイミングにへらがスレていないから、反応が良かったんだろうね。反応がいいから、ほっといても受けた、と。加えて、入りやすいウキだから、パイプより広いストロークと相まって、よりアタリを取りやすかったって事だろうね。それまでパイプでナジませていた人から見れば分かりにくい（笑）ナジミ際の動きを、広いストロークではっきり掴む事が出来るってことだ。俺にとってはストロークの「狭さ」が大事なんだけどね。

江：うひゃぁ！　まさにそんな感じが僕でしたねー（笑）。そういえば、12～13年くらい前にビッグに在籍していたNさんがよく言ってた「ストロークボケ」っていう言葉を思い出しました。これ、どうせ小池さんや伊藤さんの受け売りですよねぇ（笑）。

伊：知ってるね～（笑）。Nさん懐かしいねぇ。今釣りやってるの？

江：多分やってないんじゃないでしょうか…最後に会ったのはもう7～8年前だと思います。「ヤバい」ですよね。あのガタイで殴られたら…。Nさん家で、小川君と3人で飲んだ事があるんですけど、恐かったですもん（笑）。いやもちろん、殴られはしなかったですけど、目が座っちゃって帰らせてくれないんですよ。「俺、寂しい…」とか言って泣きそうなんですよね（笑）。マジ、軟禁状態でした。

伊：（大爆笑）。ところで小川君ってゴールデンの小川君でしょ？　こりゃまた懐かしいねぇ…。よくNさんに連れられてビッグにゲスト参加してたっけ。小川君も元気にしてるの？

江：元気みたいですよ。一年に一回位しか会えませんけどね。仕事がメチャクチャ忙しいみたいです。なんでもえらい出世しちゃったらしくて、休日も返上で会議なんかザラみたいで。

伊：ホントかよ？　あの小川君が？　人生分からないよなぁ。変な意味じゃなくって（笑）。歳とるわけだよ…（苦笑）。俺も気付いたら結婚してたし（笑）。自分でも信じられないよ…。あの頃は釣りしか頭になかったからねぇ…。江成君だってそうだったでしょ？

江：そうでしたねぇ…当時は釣りビンボーで苦しかったですけど、懐かしい青春時代でした。

伊：俺もキツかったよ…。俺なんて野釣りがメインだったから、泊まりで試釣なんてした日にゃ金がいくらあっても足りない。とくにヤマの例会なんて、帰り道はサイフの中スッカラカンだったよ（笑）。

江：伊藤さんでもそうだったんですか？

伊：そりゃそうでしょ！　実は江成君達が夢中だった管理釣り場でのトーナメントにも興味はあったんだよ。でも先立つモノがね（笑）。やっぱり優先順位をつければビッグの例会が第一だったから。実際、金銭的な問題もあったけど、時間的にもいっぱいいっぱいだったしね。

江：トーナメントにも興味あったんですか…。てっきりそんなものは眼中にないのかと思ってましたよ（笑）。

伊：そんなことはないよ。いつも「やつらとはきっちり白黒つけてやるぜ」…なーんて思ってたからね。ウソウソ（笑）。

里：（ゴホゴホッ）……。

伊：…編集長がなんか言いたそうだから、話を戻すね（笑）。つまりムクの釣りって、結局へら任せって事になっちゃう可能性がある、と。さっき江成君に解説して頂いた（笑）「ナジませ釣り」も、へら任せだよね。だって、ぶら下げてカラツンが出るっていう前提なんだもん。そこで何も反応しなかったら、もう次に進めないじゃない？　俺が言いたいのはそこなんだよ。「アタリは出させるもの」なんだからね。

江：全くそうなんですよ！　僕もそこに気付いちゃったんですよ～！　でも恥ずかしながら、僕も同じセリフを好んで吐いていた時期があったんです。弱いサワリを強いアタリへ導くための「シメ」る行為、これを得意気に「アタリは出させるもの」とほざいてました。「弱いサワリ」がある前提なのに…。

伊：それは別に間違ってないんだからいいんじゃない？　反応がなければ次へ進めないっていう意味では、俺の釣りだってそうなんだから。そんなに自分を全部否定しないでいいんだよ（笑）。俺の釣りだって万能じゃないんだし、あくまでも「伊藤洋一の釣りってそうなんだ～」って感覚で捉えてよ。何も俺は江成君やナジませ釣りの先輩方を論破しようと思ってここへ来たわけじゃないし、出来るとも思っちゃいないよ。ただ、いきなりナジませちゃうっていう出発点がちょっと疑問だなっていうだけであって、その後の組み立てや分析法には何も矛盾はないと思うから。

江：いやいや理論の構築にあたって出発点が間違ってたとしたら、それは大問題なわけじゃないですか。「だけ」だなんて片付けられる話じゃないですよ？

伊：ぶら下げてアタリが出る時代だったんだから、別にいいんじゃない？　それが大前提としてあったわけなんだから…。

江：伊藤さんはそれで納得出来てたんでしたっけ？　その当時。

伊：…分かったよ（笑）。分かったから、もうちょっと力抜いていこうよ。俺、緊張しちゃうよ（笑）。

全ては「サワリ」から。

江：ではいよいよ、伊藤さんの言う「サワリ」ってやつを聞きたいですね。

伊：いや別に、言葉の意味は一般的な使われ方と何ら変わらないよ。食いアタリが出る前のサイン、つまり前触れって事だよね。ただ江成君達や一般的なナジませ釣りをやる人がいうサワリってやつは、これから食いアタリを出そうっていうへらの直前の気配って事になると思うんだよね。水中は見えないからサワったへらが食いアタリを出したかどうかなんて分からないんだけど、イメージとしてね。それだけ動きを殺しているんだからね。ハリスもピンと張っている瞬間が多いだろうし。

俺らの言う「サワリ」っていうのは、少なくとも最終的にアタリを出すそのへらだけが動かしているわけじゃないっていうか…。それはありえないと思えるような状態っていうかさ。狙っている群れ全体の反応って言えばいいのかな？　もちろん俺らの言うサワリのことも、江成君もサワリって言うんだろうけど…。

江：分かります分かります！　あれだけ受けちゃってるんですから、1枚のへらの反応とはとても思えませんよね（笑）。もし1枚だったら、毎回その「トメ」で食っちゃってますよ。

伊：うんうん。よっぽど状態がよければそれでイレパクになるんだろうけど、そんなケースはそうそうないよ。そんなに甘くないよね（笑）。

江：それってやっぱり伊藤さんのように早いタイミングでの釣りであっても、それなりのタナを作るっていうか一定にするっていう意味において、高すぎるアタリは危険だから追いかけないって事ですか？

伊：それ微妙な質問だなぁ。例えば18尺いっぱいの深宙をやってるのに、どう考えても持つわけないようなエサは使わないよね。

江：ハァ…そりゃまぁ、当たり前ですね？

伊：ウキってある程度オモリに引っ張られないと立たないわけでしょ？　スタイルによって立ち始めるタイミングは違っても、オモリに引っ張られて道糸が張り始めないと立たないわけだからね。「立つ」ということは、ある程度の水深まで達したっていう目安になるよね。

江：ええ。でも道糸の張るタイミングは、振り込み方で全然変わってきますよ。振り切ってしまえば斜めで張る事になりますから…。

伊：18尺いっぱいの話だよ？　まず落とし込みでしょ（笑）。

江：でしたでした（笑）。

伊：その状態で「受け」が出てるってのはさ、そのタナまでエサがとりあえずは持ってるっていう証拠じゃないのかな。

江：確かに！

伊：じゃ、そういう事だよ（笑）。

江：えっ？　どういう事ですか？

伊：いやだからさ、「スネーク（戻しやトメ）」で続くんだったら続くでお構いなしって事だよ。そのアタリを取ったからってウワズるとかタナが崩壊する危険なんてあんまり感じないってこと。

江：ウワズリっていう概念が伊藤さんには全くないって事ですか？

伊：そんなわけはないじゃん（笑）。タナを一定に保つって事だってちゃんと考えてるよ（笑）。

江：ですよねぇ？　で、それはどういう方法なんですか？

伊：今喋ったこと（笑）。「受け」てる以上は、その位置でタナは出来てるって事だよ。「受け」っていうのは、へらが反応しているいいサインだって、さっき言ったよね？　エサもセッティングも、もうだいたい合ってるんだよ。合っているからこそ「追う」んだね。何の心配もいらないよ。それに江成君は受け「ちゃう」っていう表現をしたけど、ナジませるスタイルの人達って、高い位置での「受け」が怖いんだろうね（笑）。きっと、さんざんウワズリのサインだって教え込まれてきたからなんだろうけど。俺の場合、「受け」てるってことはタナが出来てるってことで、逆に「受け」ないならウワズったか、元々そのタナが間違ってるってことなんだ。

江：なるほど～！　いや確かに、僕もこういう釣りをマネしてみるようになってからというもの、高い位置での「受け」を歓迎するようにはなったんですよ、ウキの肩で止まっちゃうような。でも、追いかけていくとそうそう続かないもんだって気付いたんですよ。何枚か釣ると、スーッと入っていっちゃうんです。これは意外でしたね。ずっと恐れてきましたから。釣る事でへらが薄くなり、エサが持ち過ぎになるんでしょうね。逆に早いアタリで釣り続けていくうちに、寝ウキになってしまうっていう事であれば、エサの早切りからのウワズリを疑うんですが、そんなケースはそうそうないですし。

伊：寝ウキ？　よっぽどへらの濃い管理釣り場なんかだったら、今でも分からない事もないけど…。エサ以前にセッティングのバランスの問題じゃないかなぁ。何度も言うけど、いつでも軽いウキを使うって事が、俺の釣りのミソでもなんでもないんだよ。

江：そうでしたね（笑）。

伊：ほっといてもそうそう受け続けてくれるもんじゃないってのは感じてもらえた？　実はアゲ過ぎちゃってシーンとしてたりしてね（笑）。それは別として、もう少し突っ込ませてもらうと、エサの早切りで寝ウキって…それ、そのタイミングで釣るにはエサが持ち過ぎだからって可能性もあるんじゃないの？　カラブリ続けてたんじゃなくて、釣っていってもそうなるとしたらさ。

江：あっ！　そういうケースもあるかもしれませんね。ホントの食い頃になる前なのに、へらの活性に頼った釣りをしている、と。実はエサが合ってないんですね（笑）？

伊：そう！　その可能性も否定出来ないよね。まあ、でも今日は目をつぶりましょう（笑）。先へ進めないからね（笑）。

江：すんませーん（笑）。では、その「受け」というサワリの中から正解のエサを導くための方法を教えて下さい！　「受け」の中からどんなサインを拾うんでしょうか？

伊：最初から説明しようね。まずタナまで全然持たないエサの場合は、当然ナジミ幅はゼロ（笑）。はるか上層でエサがなくなってしまってるんだから、オモリがある程度の水深に達してウキが立った時点で、へらの反応が出ようがない。つまり受けなんて出るわけがないよね。そのエサに、へらがはるか上層で反応しているんだとしたら、ウキが立つまでの時間が若干伸びるかもしれないけどね。だから最初は、いくらかはナジむエサで……

江：ちょ、ちょっと待って下さい！　伊藤さんでも打ち出しはナジませるんですか？

伊：そりゃあ、エサの持ち具合を見るためにはね。

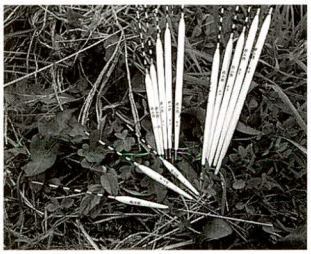
江：なんか意外だなぁ…。それって伊藤さんの釣りのタイミング的には、「持ち過ぎ」の段階ですよね？　それじゃ、僕らの釣りのスタートと同じじゃないですか？

伊：まぁ聞いてよ（笑）。似てるけど違うと思うよ。普通はここで、「どっぷり」入れちゃうわけでしょ？　俺はそんなに入れない。エサ落ち目盛りより少し入ればいいんだよ。最低でも狙ったタナの直前までエサは付いてたぜ！って事が分かればね。実は最近はもう少しナジむエサから打つようになったんだけど、それでもどっぷり「深ナジミ」じゃない。せいぜい「中ナジミ」だね。江成君に言わせれば、これでも「下からのエサ合わせ」ってことになっちゃうのかな（笑）。あ、こんなこと言うと混乱しちゃうね？　とりあえず今は忘れておいて（笑）。

競技派からのんびり派まで、すべての釣り人に使って欲しい…

へら浮子 杉山作

浅ダナスタイル
【パートⅠ・パートⅡ・ワイド・ムク】
（各1本4,500円）
フリースタイル
深宙スタイル
（各1本5,000円）



取り扱い店〈五十音順〉
埼玉・越谷 かわせみ（☎048・969・5067）　茨城・下妻 こやの釣具（☎0296・44・1619）　東京・渋谷 サンスイ川釣り館（☎03・3499・5025）
埼玉・入間 三水堂つり具店（☎042・964・2093）　栃木・益子 フィッシングハウスほその（☎0285・72・2215）　神奈川・川崎 鮒仙人（☎044・287・7470）
東京・吉祥寺 丸勝（☎0422・22・8923）　東京・青梅 吉川釣具店（☎0428・22・2467）

江：もう遅いですよ（笑）。でも頑張って忘れておきます。

伊：うん。でね、仮にナジミが出ている状態から始めたとして、へらが寄ってくればナジミ幅って減ってくるわけだよね。タナに寄ったか、狙いよりはるか上層に寄ったかは関係なしにさ。一般的にはここでナジミ幅をキープしようとするでしょ？　みんな「エサがなくなっちゃう！」って心配するからだよね。「ウワズっちゃう～！」って。でも俺はそのままで、ナジミ幅が減っていくのは良しとするわけ。よく俺らが言う「食い頃」って言葉はね、「へら」から見て「エサがなくなっちゃう！」から慌てて飛びつくんじゃないか？っていうイメージなんだよ。確かにエサの持ち具合は紙一重なんだけど、そのために一般的な持ち過ぎの心配っていうのはかなりなくなると言えるわけ。エサを合わせていく方向性がシンプルになるっていうことだよね。だから空振りしたってどうってことないでしょ？

江：なるほどなるほど。打ち出しはナジませると言えども、途中からは「上からのエサ合わせ」のような感じになってくるわけですね。「持っていない」ことだけを疑うという。

伊：うん。で、ウキの肩で突っかえ出すようになったら、もう、俺の地合の始まり（笑）。へらがどんどん寄ってきて持たなくなってくれれば、受けが出る前にエサがなくなっちゃうから、ウキの動きに注意して慎重にエサを合わせていくんだ。

江：待ってました！　そこんとこのサインがイマイチ自信を持って判断出来ないんですよ。

伊：「受けの力強さ」ってのが、まずポイントだね。「エサが持っている」のと、「エサが合っている（へらの興味を惹くことができる）」バロメーターになる。「受けが弱い」のは、何かがおかしいんだよ。もともと活性が低ければ仕方ないけどさ。

江：「力強い受け」っていうのは何となくイメージ出来るような気がするんですが…。受けの「長さ」とは違いますか？

伊：またまた微妙～（笑）。短過ぎるのも困るし、全く受けないのよりもいいけど、ハリスの長さでもいくらでも変わってくる要素だからねぇ…。でもやっぱり、ホントに合っているならアタるタイミングは早いよ。そうなるのが目標だしね。

江：つまり「ちょっと違う」って事ですね（笑）。はっきり言ってくれていいですよ、傷付きませんから（笑）。今の僕の質問で分かってもらえたと思うんですが、いつまでも「受け」ているだけでアタらないまま終わっちゃうケースが多いんですよね、僕がやると…。これって、エサがギリギリのところで持っていないっていう判断でいいんですか？

伊：まぁ、いいんじゃない？

江：やっぱそうですよねぇ…で、ホントに少しだけ持たせてみるんですけど、今度はスーッと入っていっちゃって。本来ならここでもっと受けたっていい筈ですよね？　ほどよいピンポンになる筈じゃないですか？

「ピンポン」と「通過」の境界線。

伊：うーん…ところで江成君、いつも使ってるエサと今日のエサ、いっしょ？

江：ここ最近は「ベーシック」をメインに据えてますが、この釣りで悩み出した頃ってのは、もうちょっと粘りが少ないバラける素材で組み立ててました。その分エサも大きかったんですが、ムクをムリヤリ受けさせる必要（？）もあってちょうど良かったような気がしてましたね。でも僕がやるとスレまくりで、面白くない（笑）。ここでバイブに変えると、弱い受けは出てもアタりませんね。ナジまないままそのうちに静かになります。で、またムクに戻して…と。一日中このくり返しでしたね（笑）。

伊：それだ！　結局江成君が使ってたエサってさ、「全然」持っていなかったんだろうって俺は思うな。大きさで入れるっていうのがまず怪しい（笑）。食い頃になるまでに散らす粒子が多いって事は、それだけ広範囲にへらを寄せるってことになるわけだ。ボケる原因になっちゃうよね。以前は「魚がタナに入ってくると、持つようになる」っていう時代もあったけどね、「寄せ切れた」という。最近は厳しいんじゃないかな？　それに、ムクは上がる力が弱いから、魚に揉まれての「うそナジミ」も出やすいし、トップが細い分、わずかしか残っていないエサの目方をしっかり残っていると感じてしまう可能性もあるよね。あ、こんな事は分かってるか（笑）。

江：ええ、まぁ（笑）。もしかすると、僕がムクでとってた落ち込みアタリの大半って糸ズレだったりしますかね？

伊：見てないから何とも言えないけど…可能性はあるかもね。パイプでは受けが弱くナジミも出なかったって事からして、可能性は高い。

江：やっぱエサでしたかぁ…でも、ちょっと持たせると入っていっちゃったんで、全然持ってなかったわけではないと感じちゃってたんですよね。だから悩んじゃったんで…。その時ってエサの接点が狭かったんですかね？

伊：うーん、言いにくいけど…全然持っていなかった「だけ」だろうね（笑）。ちょっとシメたくらいではピンポンにならなかった原因がそこにある。ピンポンって、ある程度へらがタナにいないとウキの動きとして見られないわけでしょ？　タナに全然集魚出来ていないとしたら、どうかな？　それから、バラけるエサを打ち切ってもタナに追ってこないような状態だったんだよね。粒子に酔って、ボーッとしちゃってるわけだ（笑）。そこでパッと締まったエサを打っても、すぐには反応しないと思うんだよね。で、黙って見送ってくれた、と（笑）。時間をかけて、段階を踏んでいけば違うのかも知れないけどね。俺が現在「（やや）下からのエサ合わせ」になっている理由もソコだよ。自分の中では以前よりもしっかりめのエサのつもり（笑）。

江：ソレですよ！　その分析を聞きたかったんですよぉ！　自分の釣れなかった理由が気になって気になって…でもこれで繋がりました！　納得です。伊藤さんの話に集中出来ます。

伊：そうなの？（笑）でももう少しだけ補足しておくね。ナジミ際という早いタイミングでの釣りは、人より多く寄せなければならないわけじゃないんだよ。そこを勘違いしないで欲しいんだ。「速攻＝寄せまくり」じゃないってことだ。そりゃ俺だって、多く寄るのは嬉しくない事もないけど、ケースバイケースだね。だから大エサも必要無い。もうひとつ多くの人が勘違いしているけど、ナジミ際で「食い頃」に「なる」エサを打つべきところを、自分から「する」エサを打っているよね。早いタイミングの釣りだからって、エサがアマ過ぎる人が多いと思う。「受け」の中で、「へら」に食い頃に「してもらう」わけ。

江：僕もなんとなくイメージとしては分かってたんですが、やっぱりアセっちゃって…。アマいから持たない。持たないからデカく、と。悪循環。昔はこれでバッチリだったんですけどねぇ、ハリもどんどん大きくしていって…。でも伊藤さんのはエサもハリも小さいし…まるで魔法でも使っているのかと感じましたよ。はい（笑）、PRどうぞ～！

伊：まさに魔法だね、「魔法の粉」はさ（笑）。ダンゴにおける、タッチとエサ持ちの関係の限界を突き破ったからね。「魔法の粉」については後でじっくり話すとして、「持ち過ぎ」という状態について考えてみようか。さっき、俺らの釣りにはあんまり持ち過ぎってのはないって言ったけど、何らかの事情で状態が急変した場合、いきなりナジミが出ちゃうケースはもちろんあるよ。当然これは持ち過ぎだよね。

江：ブラックバスや鵜が来ちゃったとか、地震が起きたとかいう事ですね？

伊：理由は何にせよ、イキナリへらが散っちゃったとか、急激にウワズっちゃったとかさ。でもイレギュラーだから。基本的にはナジミはほとんどない状態で釣っていくわけだから、そうそう持ち過ぎってのはないわけだよね。でもやっぱり受けてはいるんだけど、「弱く」なって、いくらか「ナジミが出てしまう」ケースっていうのは、一日の中で何度も出てくるわけだよ。当たり前だよね。今の釣りは、いい時間が長続きしないってのが常識でしょ？　これは俺らの釣りだってそうなんだよ。で、修正していくんだけど、ここで「持ち過ぎ」と判断して開かせたら、まず終わっちゃうね。いや実際、厳密には「持ち過ぎ」ているとは思うんだよ。でも普通に使われているような、エサがまだ大きいとか、硬いとか、粘りが強いとかっていう状態ではないと思うんだよね。

江：ハハーン、分かりますよ！　バラけ過ぎの為に「逆」に「通過」してしまうって事ですよね？「持たないから持つ」、と。変な日本語ですが。

伊：その通り。でもホラ、江成君のよりはイイ線行ってる状態での話だからね（笑）、ちょっと持たせれば受けは復活するんだよ。これがほどよい

ピンボンのコントロールってわけ。

江：そこで「通過」するようになってしまう原因ってのは何だったんでしょうね？　釣り人がいじらない限り、エサが急にバラけるようにはならないと思うんで（笑）、へらの状態が変化する事で、へらにとってはバラけ過ぎって事になるわけですよね。密度の低下とか。

伊：密度の低下なら、「本来の」持ち過ぎでいいんじゃない？

江：あ、そうですね。てことは、へらの活性が一段落ちたってことですね。

伊：そうだね。簡単に言えば、「渋った」っていうことだね。

江：あれ？　だとしてもやっぱり「本来の」持ち過ぎってことになりませんか？　エサに対する反応が減るって事は、それだけカタチが崩れずにタナまで届くって事ですからね。

伊：うーん、そう来たか。確かにエサは持っているとは思うんだよ。でも何て言えば良かったのかな…じゃあ、通過した状態のそのエサがさ、アタってもらえるだけの残り具合なのか？っていう言い方かな。本来の持ち過ぎなら、ぶら下げてアタる前提で言えば、アタリを送る事で解消出来るという可能性があるわけだけど、そんな次元の話じゃないよ、と。難しさをアピールしたいわけじゃないんだけど、そんなに幅の広いエサ合わせはしてないんだよ。エサの持ち具合もタナのキープも紙一重なんだよね、ホントに。こういうことを雑誌のノウガキで言うと、「一般の人には難しすぎる！」って批判されるわけだけど（笑）。

江：ですよね…。でも、この記事ではジャンジャン突っ込んじゃいますよ！

　伊藤さん達の使うエサってもともとかなり軟らかいじゃないですか。だから分かりますよ、大丈夫です。すいませんでした（笑）。…つまり粒子酔いだから、シメる、と。密度の低下だったとしても、その結果として活性の低下に結び付けば、同じ事ですよね。シメてさらにへらが減るようであればお手上げですが。この辺は僕の釣りと比べても、全く違和感はありません。「持ち過ぎ」という言葉の度合いは違いますけどね（笑）。…で、今喋ってて気付いたんですが、基本的にかなり軟らかいエサを使うっていうのは、硬過ぎでの持ち過ぎやカラツンっていう線が自動的に消えることになるわけですよね。軟らかい中でも段階はあるでしょうから、一般的なレベルと比べてっていう話で。

伊：そうなんだよ（笑）。バラけ過ぎって言っても、もともといわゆる硬ボソではないから、実際は軟らか過ぎってことになるね。軟らかいタッチから入る「もともとギリギリの釣り」では、エサが大きいって事は考えにくいし。

江：粘り過ぎでの持ち過ぎってのはどうなんでしょうか？

伊：俺らのエサの軟らかさでの粘り過ぎなら、基本的にピンボンされて「なくなっちゃう」ケースしかないと思うんだよなぁ…。だからどっちかって言えば、「受けだけで終わってアタらない・ナジまない」という「持っていない」ケースでの原因だろうね。「持ち過ぎで持たない」から、今度は逆に開かせてやる、と。へら釣りはややこしいよね（笑）。でも、粘りは軟らかさをキープしてタナへ届けるためだけのもので、芯の大きさはもともと小さいと思うんだよ。だってあんまり「練らない」んだからね。魔法の粉が登場したおかげで、こういうエサが打てるようになったわけだけどさ。もしホントに粘り過ぎで持ち過ぎるっていうことであれば、へらに全然やる気がないとか、薄いとかって感じかな（笑）。

江：そうですよね。では、まとめます。受けが弱くナジミがいくらか出てしまう時は「軟らか過ぎ」で、受けたまま終わっちゃう時は「粘り過ぎ」だということですね。結局この言葉だけだと、デカダンゴを含めて昔っからのボソエサの深宙の落ち込み取りと同じですね（笑）。安心しました。

伊：例外もあるわけだから、あくまでも「基本的には」っていう前提は書いといてよ（笑）。

江：そりゃ勿論です。

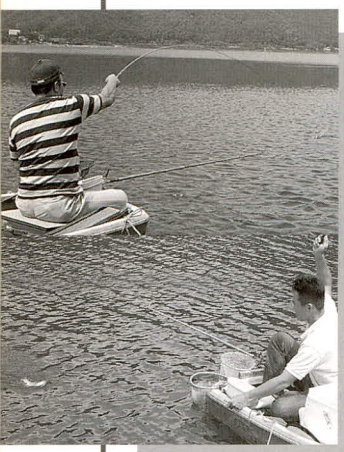
伊：短絡的にサワリからエサのタッチを示しちゃうと、思考のプロセスが全くないようで嫌な感じだけど（笑）、どう？　シンプルでしょ？

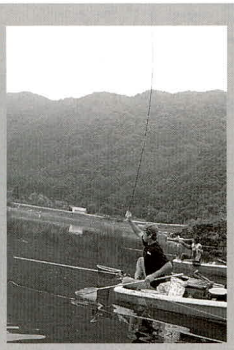
江：そうですね。それに、今僕は昔と同じって言いましたけど、一般的なボソエサなら、「軟らか過ぎ」と並行して「ボソ過ぎ」があり、「粘り過ぎ」と並行して「硬過ぎ」があるんですもんね。調べる手間が多いってわけです。

伊：エサの大きさもね（笑）。

〈以下、次号に続く！〉

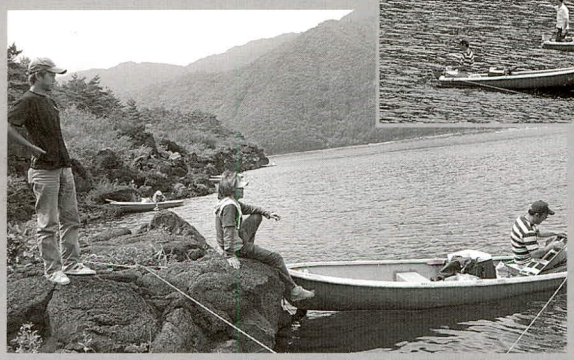
〈オマケ〉　取材風景（？）　in 西湖・石切





昨年度マルキューチョーチン王座決定戦2位の実力者である岡田。日頃はムクトップのウキを多用する岡田だが、この日は初めて目の当たりにした伊藤の理論をさっそく実践。何やら手応えを掴んだ様子。いつでも向上心を忘れない、さわやかなスーパーチャンプ!?

究極のエサ合わせが本シリーズのテーマだ。ならば野釣りと言えど、「スレ」は無用。3人とも、スレはノーカウントでの釣果。伊藤50枚、岡田21枚、江成29枚。ハカリを忘れたため、重量はナシ（笑）。かなり厳しい状況だった取材当日の西湖



江成にダブルスコア。まさにブッチギリ。渋い釣況の中、ギャラリーの岡田・田辺から溜息が出るほどの地合を作り出した伊藤洋一。「芸術」と呼ぶにふさわしい。「それって…」の田辺は、伊藤の釣りを「快楽釣法」と命名（笑）。キャッチを考えるのが大好き、お茶目な「世界の田辺」!?

「フリースタイル：スタンディングバージョン」…意味不明。家庭崩壊の危険度も高めつつ、着実に釣行回数を増やしている江成。覚醒寸前との噂も…？　全三戦中の二戦を消化したNHC東京支部では、現在総合ランキング3位。このままいけば、岡田と共にプロ認定を受けることとなる。大変なことになってきた！

平成15年10月1日発行（毎月1回1日発行）　第38巻 第10号　昭和41年5月4日第三種郵便物認可

へら鮒釣りの楽しさを追究し続ける…

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna

No.454
Oct.2003
10

特別企画

ベストフィールド筑波白水湖で繰り広げられた、
ペレ宙魔神の強烈ペレ宙実釣編…!!

中島 上
ペレ宙の真実 後編

新連載

〈5枚リミット制〉が生み出す新感覚な楽しさ！
Newゲーム【NHCへらぶなトーナメント】攻略法を、
バリバリのNHCファイターが伝授!!

NHCスピリット

【Vol.1】高橋秀樹 in 清遊湖 PART I

インビテーショナル 第3戦　戸面原ダム

特集

戸張 誠 スペシャル。

孤高の野釣り師、見参。
その釣り、「風林火山」!!

昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第38巻第10号（毎月1回1日発行）
平成15年10月1日発行

へら鮒

Monthly fishing magazine heradbuna

10
2003

特集 戸張誠スペシャル。

戸面原ダム

定価 一〇〇〇円 本体九五二円

(株)へら鮒社

驚異のエサ持ち
「粘力」
ねんりき
パワー。

エサを持たせるタネは「粘力」。

スプーン一杯を麩エサに加えるだけで、
練ることなく簡単にエサを持たせる「粘力」。
やわらかく作っても踏ん張りのきくエサに仕上げられる、
強力な「エサ持ちの素」です。
浅いタナからチョーチンの両ダンゴ、セットのバラケと、
幅広くお使いください。

2003年9月
新登場!

※麩エサと「粘力」をあらかじめよく混ぜてから水を加えてください。

粘力（ねんりき） 計量スプーン付き ¥800

つれるエサづくり一筋
マルキュー
http://www.marukyu.com/

本社・桶川工場 埼玉県桶川市赤堀2-4 〒363-8509
TEL：(048)728-0909(代) FAX：(048)728-3909
大阪支店 大阪府寝屋川市楠根南町12-14 〒572-0811
TEL：(072)824-0909(代) FAX：(072)825-0909
四国営業所 香川県坂出市西大浜北3-4-33 〒762-0053
TEL：(0877)44-0909(代) FAX：(0877)44-3909
九州営業所 佐賀県鳥栖市姫方町341-8 〒841-0023
TEL：(0942)82-0909(代) FAX：(0942)83-0909

釣り場でエサに困ったら
iモード・ホームページ
http://www.marukyu.com/i

雑誌 07907-10
T1107907101003